

海岸でのサクラマス釣りと資源増殖との関係

【はじめに】

北海道ではサケマスの釣りが盛んで、最近では海岸からのサクラマス釣りの人気上昇しています。特に、道南日本海側や津軽海峡の海岸では1月から5月にかけて多くの釣り人で賑わいます。この釣りでは小魚を模した疑似餌（ルアー）を100mほど遠投して、小魚や甲殻類などの餌を追って岸近くに回遊してきたサクラマスを狙います。5kgを超えるような特大のマスが釣れることもあり、高い人気を博しています。

サクラマスでは漁業資源の増殖を目的とした幼稚魚の放流が実施されています。放流種苗の生産にはサケと同様に河川回帰した親魚を使います。サクラマスの釣り場として名高い海岸のいくつかは、幼稚魚放流を実施している川の河口近くにあり、こうした釣り場では、回帰してきた放流魚が実際にどの程度釣れているのでしょうか。ここでは八雲町熊石地区（旧熊石町）の見市川周辺で実施した遊漁調査の結果をお示しし、資源増殖と釣りとの関係について考えてみました。

【釣り人の数と釣獲数】

見市川河口の右岸にある平坦な岩礁の釣り場（通称：鮎川平盤）を見渡せる位置に定点カメラを設置して調査を行いました（図1）。釣り人の数は2月に旬計で100人を超える年もありましたが、この時期はほとんど釣れていませんでした（図2）。釣果が伸びるのは3月下旬以降で、4月上旬から5月中旬にかけて盛期となりました。

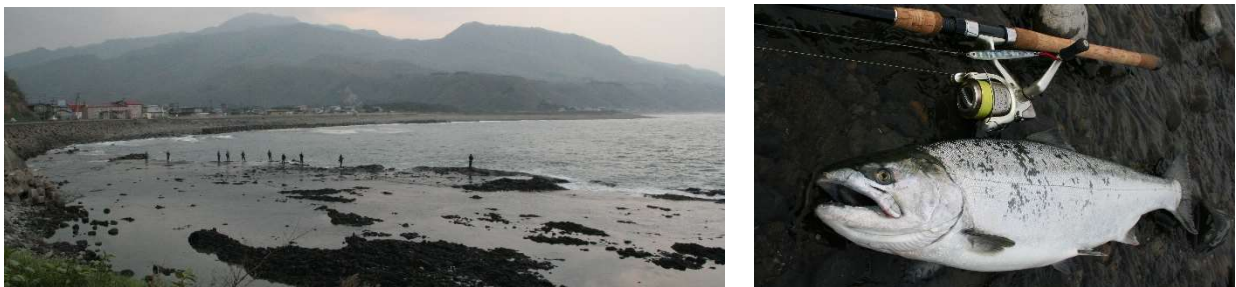


図1 八雲町熊石地区にある人気の釣り場（通称：鮎川平盤）と釣れたサクラマス

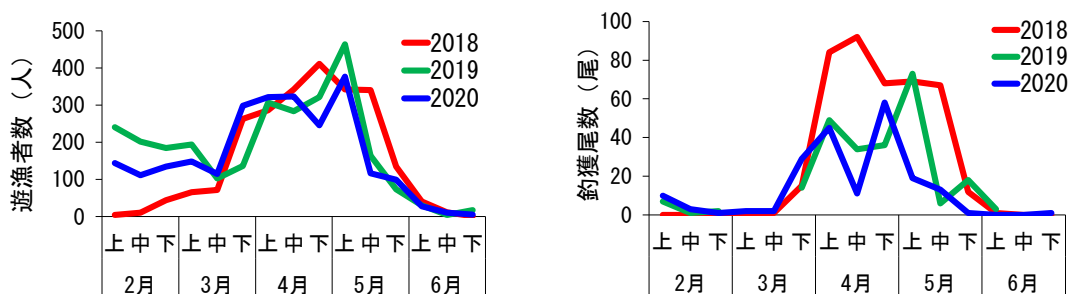


図2 鮎川平盤における各旬の釣り人の数（左図）とサクラマスの釣獲尾数（右図）

【サクラマスのサイズ】

釣れるマスのサイズを調べるために熊石地区の全域で、釣り人と同様の方法で釣獲調査を行いました。見市川から放流する幼魚には全て脂鱭の切除や背鱭後半と脂鱭の切除によ

る標識が施されているため、測定と併せて標識の確認も行いました。また、釣り人の方々に釣ったマスの測定と標識確認をさせてもらうとともに、数名の常連の釣り人の方には同様の調査を依頼しました。最も多くのマスを測定できた2018年の測定結果を図3に示しました。この年に確認した216尾中の約7割が標識魚でした。サイズでは、無標識魚の約半数が体重2kg以下であったのに対し、標識魚のほとんどは2kg以上で半数近くが3kgを超えていました。

【漁獲尾数と釣獲尾数の比較】

4月になると平盤の沖と見市川の左岸に定置網が設置されます。定置網で獲れたサクラマスは漁協の市場で見させてもらい、標識魚と無標識魚の数を調べました。また、前述の釣り調査の際に確認した標識魚の割合と熊石地区全体の釣り人の数を基に、放流魚の釣獲尾数を推定しました。漁獲尾数、釣獲尾数ともに2018年が多く、両者はほぼ同数でした（図4）。サクラマスは海に降りた翌年に回帰するため、前年の種苗放流の尾数が標識魚の釣獲尾数や漁獲尾数に大きく影響することも分かりました（図4）。

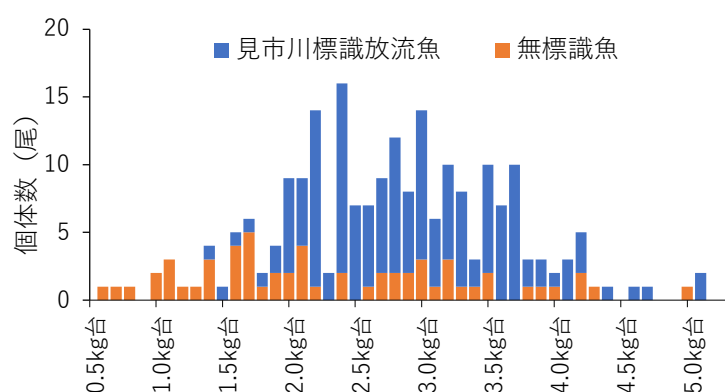


図3 釣れたサクラマスの体重の比較

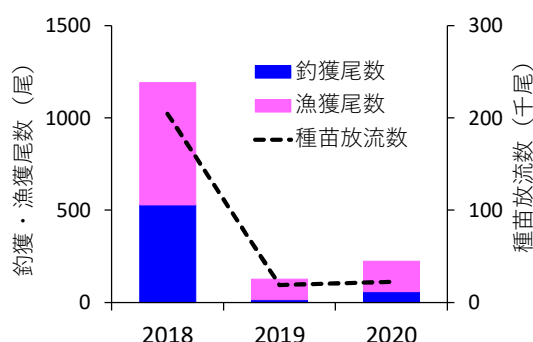


図4 熊石地区の定置網による標識サクラマスの漁獲尾数と釣獲尾数および前年の種苗放流尾数

【釣りと漁業の共存に向けて】

熊石での調査結果は、放流河川の近隣に回帰してきたサクラマスを釣りと漁業でほぼ均等に分け合っていることを示しています。回帰尾数の多い年には、熊石で釣れる大型のマスの多くが大きく成長した放流魚で、マス釣りは資源増殖の恩恵を受けていました。見市川の他にも千走川や尻別川など放流河川の周辺に人気の釣り場があります。こうした川でも資源増殖が魅力的な釣り場づくりの一端を担っているのかも知れません。一方で、過剰な釣りは種苗生産用の親魚の不足に繋がり、ひいては数年後の釣果に影響することも心配されます。サクラマス釣りでは群れが接岸すると次々と釣れることがあります。こうした場合は必要以上に釣れた分は丁寧にリリースするなど、釣り人の自制が期待されます。

近年、サクラマスの資源増殖は幼稚魚の放流から自然再生産の回復促進へと移行しつつあります。例えば道南日本海側の須築川では、サクラマスの遡上障害となっていた砂防ダムの切り下げを漁業関係者も参加する団体や地元漁協が河川管理者に働きかけて実現しました。こうした活動を知り、賛同し、広めることもまた、釣り人のできる協力の形かもしれません。

(2022年7月1日 北海道立総合研究機構 さけます・内水面水産試験場
さけます資源部 下田和孝、旧道南支場 青山智哉：現八雲町)